

「前鬼」はどのように紹介されてきたか（抄）

下北山村歴史民俗資料館

1、下北山村史（1973年）

村の西北、前鬼川を約八キロさかのぼった大峰山脈中腹の小さな盆地、そこが前鬼である。海拔八三九メートル、東南にゆるやかに傾斜してそこに約二ヘクタール（二町歩）ばかりの平地があるだけ、まわりが急峻な原生林に囲まれ、模式的な林隙集落である。この里は、修験道の開祖役行者に従った前鬼（義賢）・後鬼（義覚）の住みついたところ、その子真義・義継・義上・義達・義元がそれぞれ、五鬼熊、（行者坊）、五鬼継（森本坊）・五鬼上（中之坊）・五鬼助（小仲坊）・五鬼童（不動坊）の五家をたて、子孫相ついで自給生活つづけてきたと伝える。一九世紀の末ごろまで五戸が現存していたが、程なく三家が前鬼を去って、現在は五鬼継と五鬼助の二房をのこすだけである。

すでに二房だけになっていた一九二〇年代の後半のことだが、そのころ一町四畝（一ヘクタール）の水田があって、約一四石（二、一トン）の米の収穫をあげている。一枚の田は平均三畝という狭いもので、全部で三三枚、水温が冷たいので、用水の取口約一坪（三・三平方メートル）には稗を植えていた。気温も低いので早生種を栽培、奈良盆地よりも二〇日以上も早く、五月初旬に田植えをして、一〇月中旬には刈取りを終わった。盆地の上方約二反（二〇アール）の畑には、じゃがいも・とうもろこし・大豆・さといも・大根などの野菜が栽培されていた。魚類その他の日用品は、木の本から索道で池原に、さらに自動車で前鬼口に送られ、そこから人の肩で牛抱坂の山道を運ばれてきたのであった。

付近に修験道の裏行場といわれる三重滝（馬頭滝・千手滝・不動滝）などの勝地があり、近年は登山者が宿泊地として利用することが多くなった。前鬼川林道が開かれたので、前鬼へ行くにもずいぶん便利になったが、夏場をのぞいて一年中前鬼に住んでいるのは、小仲坊の五鬼助義价氏だけである。

（注）

以上は奈良教育大学の故堀井甚一郎教授による、前鬼集落の立地や起源および1920年代のようすを簡潔にまとめた記述である。文中の熊野市木本・池原間の索道は当然のことながら今はないが、1920年代における国道169号線の北山地方の交通や生活の実態がよくわかって興味ぶかい。歴史的な部分は少ないものの、前鬼・後鬼の五人の子の名前は明治15年前鬼村が作成した「前鬼村村誌」（後出）からとっているようである。2014年現在、五鬼助家の一坊のみが週末のみ宿坊を開いている。

なお、下北山村史にはこの他におなじく奈良教育大学の故木村博一教授による、小仲坊に居住していた五鬼助義价（もと）氏（通称五郎さん）の山の生活についての記述もある。

2、金谷上人行状記 — ある奇僧の半生—

（横井金谷著、藤森成吉訳 東洋文庫）

二十七日も雨降りやまず、（略）そのホンのあいまに、三輪、内山、岩本の三先達が柴燈大護摩を修し、宮は入堂を了えて前鬼山へ下られた。

その道程五十丁と聞えたが、雲霧を分けて八丁手前まで進むと、清らかな溪川に出会った。

ト、将監鬼熊という者が、新調の板駕籠をその岸に釣って迎えた。新調といっても、まわりの板だけで、古い木綿の敷物を敷き、古い御簾を懸けた輿だったが、それに宮を乗せると、飛ぶように